

戦後日本の読書研究の特徴とその変遷 —図書館情報学領域を中心に—

片野 樹理

現代日本において、読書は子供を中心に多様な視点から論じられ、その重要性が指摘されている。例えば、平成 30 年には、第四次『子供の読書活動の推進に関する基本的な計画』が策定され、小中高生の不読率を改善するための取り組みとして読書会、ブックトーク、ビブリオバトルなど、読書に関わる様々な活動が推奨されている。このようにますます重視されている読書を対象とした研究を俯瞰すると、その全体像はいまだ解明されていない。

本研究の目的は、戦後日本の図書館情報学分野における読書研究を多様な観点から分析することで、その特徴と変遷を解明することである。そして3つの研究課題を設定した。具体的には、1)戦後日本の読書研究は年代ごとにどのようなトピックがあったか、2)戦後日本の読書研究における研究方法にはどのようなものが適用されてきたか、3)戦後日本の読書研究はどのような著者によってなされてきたか、である。

研究方法は文献の精読である。分析対象は、戦後に発行された、雑誌『読書科学』と図書館情報学領域の学術雑誌5誌（『図書館学会年報』、『日本図書館情報学会誌』『図書館界』『現代の図書館』『Library and Information Science』）に掲載された読書に関する論文である。具体的には、タイトルに読書、読み、黙読、音読、読解、リーディング、速読が含まれているものを抽出し、最終的に743件を分析対象とした。これらの文献を精読し、主題と研究戦略、研究方法、著者の所属を主な分析の視点として整理し、その変遷を記述した。

調査結果を10年ごとに記述した。その結果、主題は「読みそのものについて」「読書法」「読書教育」の3点に集約された。これらの研究領域は、戦後から現在に至るまで一貫して行われていた。また、これら3つの主題に共通して「どのように読むか」から「どのように読ませるか」、さらに「読書後の行動にどのようにつなげるか」という段階で進展していた。研究戦略は、全体を通して概念的研究よりも実証的研究が多く行われており、研究方法としては事例研究が増加していることがわかった。分析方法も、最近では量と質の両面から行う方法が増えていた。著者の所属は、初期は教員や図書館員など実際に教育に携わっている者が多く見られたが、最近では大学の教員が多くを占めるようになっていった。

これらのことから、日本の読書研究では現在、読書後の行動が注目されており、それらが、事例研究などから量と質の量面から分析されていることがわかった。今後はさらに読書後の行動やその共有についての研究が発達すると考えられる。

(指導教員 小泉 公乃)